

つき比較考究すればわかる。雌蕊の基部には盤があつて雌蕊の下をとりまいてゐるがヨメナでは見るに困難である、其の下に子房がある。両性花の子房で實を結ばぬものはカハラヨモギなどで見られるが、かゝる點も屬を分つに重要な特徴である。ヨメナでは全部稔る。果實は扁平で倒卵形であつて開裂しない。肉質ではない、果實が扁平であるか円柱形であるかは大切な特徴である。果實の皮を取り去ると中に直立した種子が出る、種子は薄い種皮をかぶり中に肉質の胚がある。幼根は下部につき円錐形で短かく、子葉が二枚上部にある。胚乳はない。果實には表面に毛が生えてゐる。果實の上部に短かい小杯状のものがある。これは冠毛の短かくなつたものである。これは短かい剛毛がより集まつて下部が互に癒合して出来てゐるので、この剛毛の長さがヨメナの種類の分類には必要なのは上記の検索表に出してある通りである。コンギク類とは冠毛の長さが短かいので別の屬となつてゐる。だからコンギクと區別するには冠毛を見たらすぐわかる。若苗だつたら内地のヨメナは光澤あつて毛も少ないし、コンギク類は光澤なく毛があつてザラザラしてゐるから區別出来る。冠毛を他の科の萼に相等するものだといふ人もあるがさうでないといふ人もある。頭状花から小花をすべて取り去ると花盤があらわれる。小さい穴がぽつぽつある。其の穴の凹みに小花の子房の下部がついてゐた事を知る。この穴の縁がヨメナでは高くはないが他のものでは高くなつて縦に不規則に裂けてゐるものがある。これのよく發達したものがアザミで見られるがこれを花盤剛毛 (Seta receptaculi) と云ふ。この剛毛を他の科の苞であると云ふ人もあるが、さうでないといふ人もある。この頭状花序が穂状花序が短かくなつて出来たと考へる人はこの剛毛をもとの穂状花序の小花の苞であると云ふし、繖形花序の小花の小梗が短かくなつて頭状花序になつたと考へる人は苞と考へない。花盤の邊には總苞がある。この總苞は多數の總苞片より出来てゐるがヨメナでは大体三列程あるがこの總苞及び總苞片の形狀が分類上重大な役目をする。菊科の鑑定にはこの總苞の形狀で大体わかるので各屬種につきよく比較考究すればよい。

## 日 本 植 物 覺 書

(J. OHWI: *Sertum Japonicum*)

大 井 次 三 郎

(5) ツルメヒシバ — *Axonopus compressus* BEAUV. はアメリカ熱帯の原産で現在では舊世界の熱帯にも生育して居るが今回琉球でも發見された。恐らくクリノイガと同様に渡りし者であらうが全形特に小穂が稍大形で長さ 2.5-2.7 mm. もあるのが著しい、しかし變化の多いものとの事であるから本種にあてゝも間違ひはないと思はれ

る。尙ハネキビも *Axonopus semialatus* HOOK. f. と呼ばれるが之れは本屬とは全く縁のないもので故 HITCHCOCK によれば *Alloteropsis semi-alata* (R. BR.) HITCHC. であると云ふ。ツルメヒンバは *Digitaria*, *Paspalum*, *Eriochloa* 等に類似したもので外形は *Paspalum conjugatum* BERG. オガサワラスズメノヒエに酷似した所がある。八重山列島の石垣島で園原咲也氏が採集されたのを高嶺英言氏の御厚意によつて見る事が出来た。

16) **オニカモジグサ**——*Elymus* 屬と *Agropyrum* 屬は普通は小穂が一節に一個着く (*Agropyrum*) か二個着くか (*Elymus*) によつて區別されて居るし。大体はそれでよいのであるが。實際 *Agropyrum* を澤山見て居ると本邦のカモジグサでもアヲカモジグサでも甚稀れには一節に二個以上つけるものが出て来る。又エゾムギでも穂の上部及下部には唯一個の小穂をつける事が決して稀ではないので往々にして區別が困難と成つて来る。北米でも往々その様な事實があると見えて HITCHCOCK, *Manual of the Grasses of the United States*, 246 の *Elymus* の條下に the species in which the spikelets are mostly solitary can be distinguished from *Agropyron* by the narrow or subulate glumes. と云つて居るし同書 229 の *Agropyron* の條下にも Spikelets ..... solitary (rarely in pairs), ..... として居る。従て此は絶對的區別點では有り得ない。

扱オ=カモジグサの場合は本田博士が和文欄で書かれた様に小穂が双生すると云ふ事實以外はカモチグサに最もよく似て居るので廣い意味では同種の類に毛茸を生じた變種と考へられる。従つて本種は *Elymus* に入れるよりも *Agropyrum* に移した方が適當であると信じる。此の兩屬間の區別はもつと精細に比較研究する必要がある。Nevski の論文も此の點に關しては明かではない。

***Agropyrum tsukushiense*** (HONDA) OHWI comb. nov. = *Elymus tsukushiensis* HONDA in Bot. Mag. Tokyo 501 (1936) 391 (et 572, sub *Clinelymo*). = *Agropyrum semicostatum* NEES var. *tsukushiense* (HONDA) OHWI sched. —— Hab. Kiushiu (!).

17) **タカネエゾムギ**——エゾムギとテンキが同屬か別屬かは可なり困難な問題ではあるが私は 現在 *Elymus* と *Clinelymus* とを同屬と考へる。*Elymus* の type species は *E. sibiricus* LINN. 即エゾムギと考へる學者が多いので。左様すると此の兩屬は type が同じ種である事に成り *Clinelymus* は成立しない。従つてエゾムギに近いタカネエゾムギはやはり *Elymus yubaridakensis* (HONDA) OHWI としてたい。

***Elymus yubaridakensis*** (HONDA) OHWI comb. nov. = *Clinelymus yubaridakensis* HONDA in Bot. Mag. Tokyo 50 (1936) 572. —— Hab. Yezo : m. Yubaridake (!).

18) **コイヌガラシ**——*Nasturtium microspermum* DC. と *N. sikokianum* FR. et SAV. は明に同種であるが MERRILL によると LOUREIRO, Flora Cochinchinensis (1790) 397 の *Ricotia cantoniensis* LOUR. は本種である。従つて Rorippa に移せば *Rorippa cantoniensis* (LOUR.) OHWI となる。

**Rorippa cantoniensis** (LOUR.) OHWI comb. nov. = *Ricotia cantoniensis* LOUR. Fl. Cochinch. (1790) 397 = *Nasturtium sikokianum* FRANCH. et SAVAT. Enum. Plant. Japon. 2 (1879) 277. — Hab. in Japonia, satis communis.

19) **ヒロハヒメキンボウゲ** —— *Ranunculus subsimilis* PRINZ & SCHMIDT と云はれる形の植物が北鮮にも分布する。私は數年前咸鏡北道の西水羅の海岸に近い砂地で採集したが昨年齋藤龍本氏は同地の富寧でも採集せられた。本邦領土内では未記録である。東北地方の海岸に生ずる *R. Kawakamii* MAK. (ヒメキンボウゲ) や北米産の *R. Cymbalaria* PURSH. に近縁のもので後者とは葉の鋸齒の数が相違し、前者とは葉の巾が廣いので區別される。E. HULTEN によれば *R. halophilus* SCHLTDL. は此種であらうとの事である。

**Ranunculus subsimilis** PRINZ & SCHMIDT, Veg. Siber. Mongol. Front. (1921) 236. — Hab. Korea borealis: Seisuiria (J. OHWI n. 454) et Funei in prov. Kampoku (R. SAITO n. 2798).

20) **キレバフタゴケマン** —— 昨年フタゴケマン *Corydalis triflora* OHWI. の出版直後荒木英一氏からそれによく似て葉の分裂の細かい植物を頂いた。但馬國朝來郡山口村の産である。比較して見ると但馬のものは葉の分裂が一層深く成つて居る外、花の色が稍濃く、大きさも大きいので此の特徴が一定して居れば種とすべきものと思はれる。此所では變種として記載する事にし、荒木氏を紀念する爲めに var *Arakiana* OHWI とする。

**Corydalis triflora** OHWI var. **Arakiana** OHWI var. nov. — Foliolis magis dissectis, floribus intensius luteis 16–17 mm longis a typo diversa. — Hab. Hondo: Yamaguchimura in Tajima (Y. ARAKI n. 6925).

21) **ハナビスゲ** —— 一名ジウモンジスゲは本邦では従來台灣、並に屋久島種子島だけに限られて居た種類であつたが最近千葉常三郎氏から九州の肥前國西彼杵郡長浦村形上川の上流の河畔にて採集せられた花序の標本を頂き、又同氏を通じて馬場胤義氏からも根莖のある標本を頂戴したので九州の本土にも産する事が明かに成つた。此種は外觀の甚だしく變つたものでどう見てもスゲと云ふよりもオホシンジユガヤに酷似して居て、花序は長い花莖に數段に亘つて圓錐花序を形成して居る。此の花序が圓錐狀であるのと小穂基部にある原葉 (Prophyllum) が sterile ではあるが果囊に似て來るのと従來はアブラシバやミヤマジユズスゲ等と共に Indocarex と云ふ亞屬ともされて居た程である。しかし花序が分岐する事は他のスゲにも往々に見られる現象

である上に果囊から枝が出る事は他の類にもあるので私は特別な亞屬とはせずに三個の柱頭を有する *Eucarex* 群の單に花序の分枝した型に過ぎないと考へて居る。

## テングノハナ石垣島に出づ

大井次三郎

テングノハナ (*Illigera luzonensis* MERR.) はハスノハギリ科に屬する蔓性植物で始め比律賓で發見され、次いで台灣恒春の牡丹社で中原源治氏が採集した事は早田博士の台灣植物誌科に出て居る。その後本邦では台灣以外では知られなかつたが昨夏多和田眞淳氏は之れを石垣島伊野田で發見せられた。琉球列島には初めての記録である。

種名は PRESL のを MERRILL が變更したのであるが DUNN (in Journ. Linn. Soc. 38. 1908) は *Illigera ternata* DUNN. を用ひて居る。又 VIDAL の Atlas を見ると小葉の巾が狭く先きが尖つて居るが此の程度の變異は見遁してもよいのであらう。多和田氏によると花は赤色であると。

## 本邦に新しき北鮮産二植物

大井次三郎 初島住彦

咸鏡北道茂山郡延上面の九州帝國大學演習林内から本邦領内に未記録の二種を報告する。*Caltha natans* PALL. ヒメエンカウサウはエンカウサウに似て花が小さく白色であるので容易に認められる植物で歐洲では露西亞領の Perm からシベリアのミヌシンスク以東、北蒙古、トランスバイカル、興凱湖畔、カムチャツカ北部、等に、北米ではアラスカからアルバータ及北部ミネソタに生育して居る。

*Sedum Selskianum* REGEL et MAACK. はソソバキリンサウ即ち *Sedum Aizoon* LINN. に最も近い植物であるが、全体に毛茸があるので此れ又容易に區別の出来る著しい特徴を持つた植物である。アムール及び滿洲に分布する事が知れて居た。

1) *Caltha natans* PALL. Reise 3 (1776) 248; REGEL Pl. Radd. Polyp. (1861) n. 80; HULTEN Fl. Kamtch. 2 (1928) 95; KOMAR. et ALISOV. Key Pl. Far East. Reg. USSR. I (1931) 526.

Nom. Jap. Hime-enkoso.

Hab. Korea borealis: Enjomen in prov. Kampoku (S. HATUSIMA).

2) *Sedum Selskianum* REGEL et MAACK, in REGEL Tent. Fl. Ussur. (1861) 66, t. 6, f. 9-11; FRÖDERSTR. Gen. Sedum 2 (1930) 80 (pro *S. Aizoon* ssp.).